木下尚江著作集

第五卷

明治文献

木下尚江著作集第5巻（第一回配本）

昭和四十三年四月十日第一刷発行©
定価千二百円

著者　木下尚江
発行者　藤原正人

発行所　株式会社　明治文献
東京都豊島区南池袋2丁目8番5号
振替・東京36290番
電話・東京(984)0521

印刷　江明印刷所
製本　河上製本

例　言

一、『懺悔』も『荒野』も、原本は四六版、仮綴である。

一、覆刻に当っては、初版本を使用し、巻末の広告はのぞいた。

一、『荒野』は、誤植がきわめて多い。明白なものだけをひろって、巻末に正誤表を付した。引用文の原資料など参照できなかったので非常に不十分なものである。御教示を得たい。

一、『懺悔』は、句読点が不統一である。32ページ以後、句点は使われていない。

一、解説の漢字は引用文をふくめて、新漢字に統一した。

序

一、予が始めて「懺悔」を書くことを思ひ立ちたる時一友來りて諫めて曰く『それは大人君子にして始めて爲すべし、君輩の妄りに企つべきことに非ず』と、予は大に其言を是なりと思ひしも、予が當初の目的は、日頃の知人及び未見の同志の前に我が思想變轉の趣を明かし、凡ての舊き關係より全然脱却せばやとのことに在りしかば、此の懇ろなる友の忠言をも直に受容することをなさゞりき、今まさに之を書き終るに至りて予は一大歡喜の情に堪えざるものあり、げに名も無き路傍の草花にも造化の深き心は豊かに宿りけり、最上の智識は自己を知ることなり、錦の寄せぎれは一反の麻布に如かず、借れ着して市人の宴に誇らんよりも、裸體にして蒼天の雲に嘯かんこと遙かに優れり、

一、考へ來れば有情非情、敵味方、一事一物皆な我が恩人ならぬは無し、停車場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

の待合に不圖見たる新聞の一句、眠られぬ秋に響きたる月夜鴉の一聲が、却て群賢の說法、百冊の經書に優して我蒙を啓發したるの類、擧げ來れば一々に算し難からん、予は今ま暫く記憶鮮明なる先輩朋友の名を瞑想默誦して、多年誘掖の厚誼に感泣す、

一、昔し使徒パウロは基督の復活に「永生」の鍵を發見せり、曰く『復活なくんば飲食するに如かず』と、此の激越の一語は實に曾て予の全心を把握したりき、予は其時未だ基督を知らざりしが、パウロの熱心に動かされて敢て彼れを信じたりき、予は又た實にパウロに導かれて結婚罪惡論者となりぬ、然れども「復活」に關するパウロの意識は不明なりき、否な獨りパウロのみならず、基督敎その物が此の「復活」の一語を基礎として建築せらるゝに拘らず、其の「復活」の意識極めて不明なり、今や努めて「復活」に觸れざらんことを欲するものすらあるが如し、然れども「神の永生」を說くのみならば、是れ誠に無益の贅澤

なり、「人の永生」を發見する所にこそ宗教の要義始めて存するなれ、然るに「人の永生」の爲めに基督教に一大難關あり、「肉慾」を指して直に「罪惡」となすこと是れなり、故に基督教に在りては、肉に於ける永生の奧義を拋棄して、「屍體の蘇生」を云々す、豈に一大謬想に非ずや、理性あるものが、今日に至りて「復活」を避けんと欲する所以のもの其故なしとせず、

一、生殖は永生なり、故に戀愛は神聖なり、是れ最始の原理にして又た最終の奧義なり、去れど彼の文明を看よ、文明の精粹と稱する都會を看よ、戀愛は茶番の遊戯の如くに愚弄せられ、人の子は却て飲食の奴隷となりて滅び行きつゝあるに非ずや、わゝ泥醉の文明よ、醒めよ、悔いて速に「原始」に復へれ、

一、予は本年の八月を以て、母を葬りたる麻布南部坂の寓居に筆執り初めしが、後ち居を山に移すに及で再び稿を新たにせり、而かも一片の痴情捨て難きものあり、舊稿の緒言に充てたる「懺悔の苦痛」の一章を留めて、之を本書の卷頭

に加へぬ、是れ懐つかしき「南部坂」の紀念なり、

明治三十九年十二月十一日上州伊香保の客舎に於て

木下尙江

懺悔目次

懺悔の苦痛……一
第一章　人生何物ぞ……一八
第二章　死の恐怖……二五
第三章　先祖問題……四七
第四章　御巡幸……六七
第五章　民權家……七九
第六章　自由と血……八四
第七章　二本の杏樹……八九
第八章　戀と墮落……九七
第九章　蠢々……一〇四

第十章　父の死……一〇九
第十一章　一大空洞……一二三
第十二章　故郷を失ふ……一三二
第十三章　基督教……一四四
第十四章　辯護士……一四五
第十五章　結婚罪惡論……一五二
第十六章　狂乎夢乎……一六一
第十七章　消滅を如何……一六七
第十八章　入獄……一七五
第十九章　神の愛……一八一
第二十章　活說教……一八八
第二十一章　出獄後……二〇一

第二十二章　母の心……二一〇
第二十三章　永生とは何ぞや……二一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

懺悔

木下尙江

懺悔の苦痛

（一）

予は曾て斯く思ひたり、神の前に懺悔したらんには、重ねて人の前に之を爲すの必要あらざるべしと。

今に至りて全然其非を覺りぬ。

予は未だ曾て眞に神の前に懺悔したることあらざりしなり、自ら懺悔したりと思ひしことの無きに非ず、去れど其は決して眞實の懺悔にては非ざりしなり。

予は幾度も涙を以て神の前に祈りたり、半夜數々人なき處に於て神の赦しを望み

たり、然れ共予は果して我心の隅々を打ち開きて、神の光の照らさんことを求めしや。否な、々々、決して然らず、予は唇を以て我罪を告白しつゝも、我が兩手は胸を抱きて罪の影を掩はんと欲せしなり。

愚かにして臆病且つ傲慢なるものよ、予は神をも欺かんと欲せし也、懺悔果して何處に在りしや。

此の怖るべき愚かなる詐僞を、予も幾度か思はざるには非りき、然れども眞個の懺悔は我が生活の全破壞なるを如何にせん、虛僞の生活を全然破壞して、眞實の生命に入ることの光榮は、予も亦た之を想ひ回らさざるには非りき、去れど是れ誠に予に取つては殆んど堪ふべからざる苦痛の事業たりしなり、爰に於てか予は遂に予自らをも欺く淺間しき身とは成り果てぬ、予は我が罪惡を思ふの苦痛に堪へざるが爲めに、强いて之を思ふまじと企てぬ、然り、予は我心をさへ忘却せんことを欲望したりし也。

而して世に對し人に對しては、予は敢て神を信ずと揚言せり。

嗚呼、恐るべく憎むべき僞善者よ、予は實に幾度も我僞善の瀰縫に得堪へずなりぬ、而して尙ほ且つ斷然明白に懺悔するに及ばざりし所以のものは、目前生活の破滅を思ふ恐怖の一念に外ならざりし也。

目前の生活——是に既に虛僞の生活に非ずや、是れが破滅は恐怖に非ずして、却て眞生命に入るの門に非ずや、予は之を知らざるに非ざりき、予は之を思はざるに非ざりき、尙ほ且つ目前の恐怖に戰慄して、愈々益々僞善の瀰縫を重ねたり。

神よ憐み給へ、僞善者の苦痛は隣人の知る所にあらず、僞善者の刑罰は、彼れ自身の劒を以て日夜に不斷執行せられつゝあるなり。

予は實に此の苦痛の火中に空しく多年を消費せり。

苦痛は年と共に加はれり。

而して今や逃るゝに術無き窮處に迫りて、一大鐵槌は突如予の身心を粉の如くに

擊ち碎きたり。

母遂に長へに逝き給ひし也。

（三）

生まれて病弱、長じて放逸なりし予は、三十八年の長き、母をして遂に一日の安慰をも覺えしむること能はざりし也、去れど膝に抱きて乳を賜はりたる初より、病軀最早語を發するさへ苦しく見へ給ひたる終りまで、母の嚴格なる慈愛は、予に取つて生命の源泉、地上唯一の權威なりき。

病ひの枕に支へ給ふ母の白髮を見て、予は實に無量の痛みを覺えぬ、母の著しき衰弱は、其兒を憂ひ給ひたる積年の疲勞に非ずや、而して今に至て尙ほ毫しも其心を安じ給ふと能はざるに非ずや、如何なる災禍の、如何なる時を以て、其愛兒と一家とを襲ひ來らんかは、片時も老いの心に忘れ給ふと能はざる憂慮に非ずや。予は數々此事を思ひ浮べて獨り惑ひたり、母の長生は果して母の幸福なりや否や

と、予は予の前途に黑雲の濛々立ち迷ふものあるを想見する毎に、墳墓に近き母をして重ねて悲痛の血涙を絞らしむるの慘事あらんを慮りて、心身の劇しく震ひ動くを覺へたり。予はまた實に此の如きことを思ひ廻らしぬ、我母の半夜の安き夢路より直に永遠の睡眠に旅立ち給ふことあらんには、如何ばかり自他の幸福ならんかと、予は母をして人世の悲慘に老いしめたり、予は苦しき母の臨終を見んことの痛みに堪へず、願くは衰弱せる母をして極めて〳〵平安に死の坂を越へしめ給へとは、思ふとも無しに數々求めたる予の祈禱にてありし也　予は時々心付きて愕然として驚きたり、看よ予は母の爲めに平安の死を祈るに似たりと雖も、實は母の死の一日も早やからんことを求めつゝあるにては非らざるやと、――此時予は我心の鬼の如き恐ろしさに泣けり。

然れども予は此世の限り何時までも我母の生存し給はんことを祈りたり、病の去らずば去らざるも可也、予は力の限り看護しまいらせん、災禍の來襲せば暫ばし

待て、予は如何なる道を求めても必ず之を避けん、母の愛は予の爲めに宇宙間唯一の眞實なり、母の死は直に予自身の滅亡なれば也。

悲しいかな、死の影は日一日我母の面を掩ひ來れり、而して災禍の網は漸く地に普くして、動もすれば忽ち母の枕頭より會釋なく予を縛し去らんとす。

斯くて明治三十九年五月六日の日はツレなくも明けぬ、是れ予の爲めに大審判の日なりき、我母の病勢は僅々半夜の間に驚くべく增し加はりぬ。醫師は沈默するのみ。

予は予の妻と病床の左右に座して、枯枝の如き母の手を取り、其の脈搏を檢しつつ、瞬きもせで母の面を凝視せり。

母の唇頭には尙ほ微かに呼吸の殘れど、最早や物言ひ給ふべくもあらず、外觀の左まで苦痛潛めりとも見へ給はぬは、既に苦痛の餘力なきまでに衰へ給へるにやあらん、我が指端を通じて僅に響く母の脈搏は、さながら千萬里外なる他界の消

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook